# ニッヤ遺跡

長野県上伊那郡宮田村

ニッヤ遺跡緊急発掘調査報告書

1980

南信土地改良事務所

宮田村教育委員会

# ニッヤ遺跡

長野県上伊那郡宮田村
ニッヤ遺跡緊急発掘調査報告書

1980

南信土地改良事務所
宮田村教育委員会

# 序

宮田村は、この10年間に全村の圃場整備事業を実施した。この二ッヤ遺跡は、その最終年度に当る昭和55年度事業として実施された二ッヤ地区にあり、昭和28年の分布調査によって確認された遺跡である。

圃場整備事業に先行して、宮田村教育委員会が編成した調査団（団長 友野良一日本考古学協会員）により、昭和55年６月から、緊急発掘調査が行なわれた。

調査の結果の詳細は本文に譲るが、出土した住居址及び土器・石器等の遺物から、縄文時代中期後葉と同晩期の２時代に亙る集落址であることが確認された。

特に縄文晩期の遺跡については、長年県下にも例が少なく今後の研究に大きな意義をもたらすものとして欣快に堪へない。

本報告書の刊行にあたり、関係各位に対し心から御礼を申し上げる次第である。

昭和56年正月

宮田村教育長　林　金茂

図１　１．二ッヤ遺跡　２．あみだ原遺跡

# 例　　言

1．本書は、南信土地改良事務所が計画した、宮田村圃場整備事業に伴う二ッヤ遺跡の緊急発掘調査報告書である。

2．調査は南信土地改良事務所の委託により、宮田村教育委員会が調査団を編成し、実施した。発掘調査は、昭和55年６月25日より、同年９月29日まで残務整理を含め実施された。

3．本報告書は契約期間内に報告書をまとめることが要求されており、調査結果の綿密な検討や研究の時間が十分にとれないので、検出された遺構・遺物をできるだけ図化することに重点をおいた。

4．資料作成では、遺構は、平沢八千子・白鳥あき子・保科徳子・下島早苗・小木曽清、遺物の実測は、下島早苗・保科徳子・白鳥あき子・根津清・東野広次。

5．写真撮影は、小木曽清・友野良一・東野広次。

6．本書の編集は、宮田村教育委員会が行った。

7．遺物分布図中の記号の種別は各図に示してある。図中の番号は遺物台帳と同一のものを使用したが、出土した遺物は、すべて記入することはできなかった。

8．遺物番号は、図・図版とも台帳番号と同一なものを本文中でも使用してある。

9．調査参加者

墨矢勇夫・平沢りん・平沢清志・大沢実・後藤善二・酒井次郎・久保田文子・小田切賢・平沢八千子・白鳥あき子・保科兼雄・保科義重・春日宗・伊藤柳治・小田切房子・宮沢一雄・藤川周一・下島早苗・田中かす子・東野広次・北沢武雄・春日松己・保科徳子・本田甲子雄・百沢乙平・太田利雄・小木曽清・友野良一の各氏、

教育委員会事務局

教育長・林　金茂、教育次長・森下清、事務・古河原正治・竹松正恵・伊藤頼男・平沢美智子。

# 目　　次

序　文
凡　例
目　次
挿図目次
図版目次
Ⅰ．遺跡の概観……1
遺跡の立地……1
地質・層序……1
Ⅱ．調査の経過……2
Ⅲ．調査の結果……3
第1遺跡の概要……3
第2縄文時代の遺構と遺物……9
1.弓住居址……9
2.土壙……10
3.ピット群……11
4.遺物……20
Ⅳ．調査のまとめ……23
Ⅴ．おわり……24

# 挿　図　目　次

図2　二ッヤ遺跡の位置……1
図3　層序……1
図4　宮田村遺跡分布図……2
図5　グリッド設定図……4
図6　遺構配置図……5
図7　遺物分布図……7
図8　第1号住居址……9
図9　第1号土壙……11
図10　第2号土壙……11
図11　第1号土壙出土土器（$\frac{1}{2}$）……11
図12　第Ⅰ・Ⅱ・Ⅳ（$\frac{1}{2}$）……12
図13　第Ⅳ群土器（$\frac{1}{2}$）……13
図14　第Ⅳ群土器（$\frac{1}{2}$）……14

図15　第Ⅳ群土器（$\frac{1}{3}$）……15
図16　第Ⅴ群土器（第1号土器）$\frac{1}{3}$……16
図17　打製石斧実測図（$\frac{1}{3}$）……17
図18　打製石斧磨製石斧実測図（$\frac{1}{3}$）……19
図19　横刃・敲打器・磨製石斧・環石・石錘……19

# 図　版　目　次

図1　宮田村と二ッヤ遺跡を（東方から）……序
図20　二ッヤ遺跡遠影……27
図21　二ッヤ遺跡遺構……28
図22　二ッヤ遺跡発掘状況……29
図23　第1号住居址……30
図24　第Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ群土器……31
図25　第Ⅳ・Ⅴ群土器……32
図26　石器……33

# Ⅰ. 遺 跡 の 概 観

## 1. 遺跡の立地（図2）

二ッヤ遺跡は、長野県上伊那郡宮田村駒ケ原地籍1877－2．3番地、標高724～726mの地籍にあり国鉄飯田線宮田駅の西南 2.7kmのところに所在する。遺跡の南は、中央アルプス木曽駒ケ岳に源を発する太田切川が流れ、北は太田切川の支流小田切川が作った駒ケ原台地の西先端部に当る。この二ッヤ部落南西の一体は山林原野が多かったが、昭和の初年に行われた耕地整理以後は、大方水田として利用されるようになった。

## 2. 地質・層序（図3）

太田切扇状地は2.5～4.5%の勾配で西高東底に傾斜している。本遺跡の所在する宮田村は、木曽山脈の中程に位し、その地質構造は、領家変成岩が主体をなしている。岩質としては、斑状花崗閃緑岩・縞状片麻岩・中粒の黒雲母花崗岩・細粒黒雲母花崗岩等の岩質からなっている。宮田村の平担部は、これ等の岩石が基盤となって洪積台地が形成されている。この台地上部に新期ロームが1～5m堆積した地質構造である。

下図の層序は

1層……15～20cm　耕土・黒色土　　2層……18～20cm　地場層

3層……8～17cm　黒土層Ⅰ　　4層……7～10cm　黒色土層Ⅱ

4層……3～7cm　黒褐色土　　5層……赤褐色ローム層

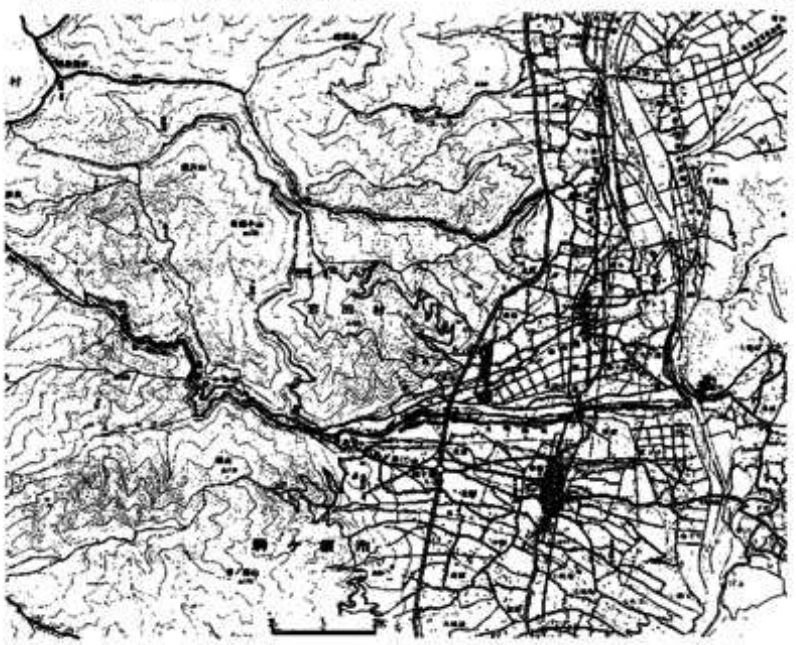


図2　二ッヤ遺跡の位置

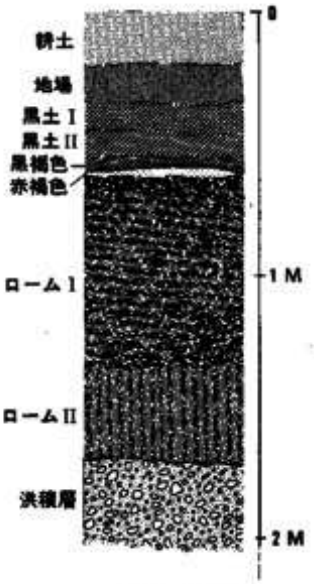



図3　層序

# Ⅱ. 調 査 の 経 過

昭和30年代の初め宮田村埋蔵文化財包蔵地の調査の折遺物の採取が行れその存在が知られた。今回圃場整備工事が行れるに当り、再確認と云うことで分布調査を行った結果、縄文晩期の遺物が圧倒的に多いことが明かになったので、その集中個所より調査を進めて行くことにし、昭和55年6月25日から9月29日まで宮田村教育委員会が友野良一団長以下調査団を編成調査を実施した。

森下　清

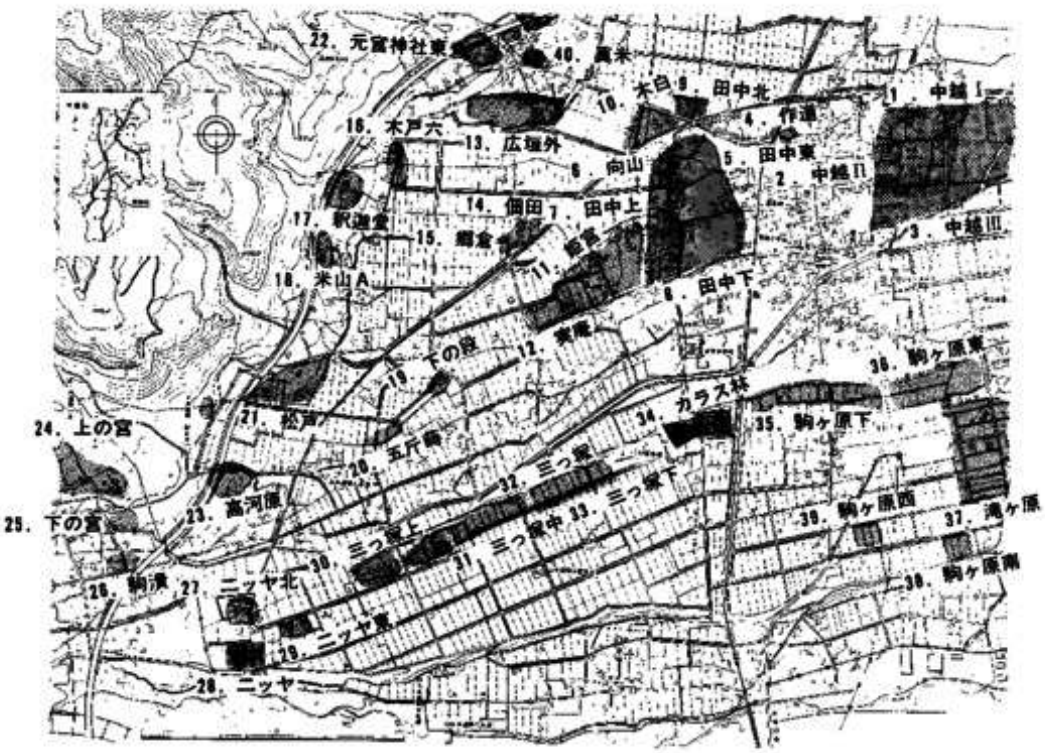



図4　宮田村遺跡分布図

# Ⅲ. 調 査 の 結 果

## 1. 遺跡の概要

今回の調査区域は、二ッヤ遺跡（宮田村教育委員会が作成した宮田村遺跡分布図による）の南側を再調査して、確認した地点を調査区域とした。東西70m・南北80mの5,600㎡を調査した。

平沢清志氏住宅より東三枚目の水田を基点として、東西にA・B・C……南北に1－2－3……のグリッドを設定した。

調査の結果、遺構は、縄文時代晩期の住居1軒、土壙2基、ピット35個、これらの調査地点は、E－2・E－3グリッドに発見された遺構である。遺構の発見される層位は黒色及黒褐色土が深く堆積した場所に作られているのが特色である。遺構は駒ケ原開田時に大方破壊されたもので、集落の中心は西方にあったものと思われる。

遺物は、縄文中期後葉土器と後期の土器片が小量発見されたが、大方は縄文晩期の遺物である。

表1．宮田村内の遺跡

| 名称 / 番号 | 遺跡名 | 所在地 | 縄文時代 | | | | | 弥生 | 古墳 | 奈良 | 平安 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 草創期 | 早期 | 前期 | 中期 | 後晩 | | | | |
| 1 | 中越遺跡Ⅰ | 中越・町 | | ○ | ○ | ○ | | | | | |
| 2 | 中越遺跡Ⅱ | 中越・町 | | | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | | |
| 3 | 中越遺跡Ⅲ | 中越・町 | | | | ○ | ○ | | | | |
| 4 | 作道遺跡 | 町 | | | | | | | | | |
| 5 | 田中東遺跡 | 北割 | ○ | ○ | | ○ | | | ○ | ○ | ○ |
| 6 | 向山遺跡 | 南割 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 7 | 田中上遺跡 | 南割 | | ○ | | ○ | | | | ○ | ○ |
| 8 | 田中下遺跡 | 南割・町 | | | | ○ | | | | ○ | ○ |
| 9 | 田中北遺跡 | 北割 | | | | ○ | | | | ○ | ○ |
| 10 | 柏木遺跡 | 北割 | | | | ○ | | | ○ | ○ | ○ |
| 11 | 姫宮遺跡 | 南割 | | ○ | | ○ | | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 12 | 実慶遺跡 | 南割 | | | ○ | ○ | | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 13 | 辻垣外遺跡 | 北割 | | | | ○ | | | ○ | ○ | ○ |
| 14 | 細田遺跡 | 北割 | | | | | | | ○ | ○ | ○ |
| 15 | 郷倉遺跡 | 南割 | | | | | | | | | ○ |
| 16 | 木戸穴遺跡 | 北割 | | | | ○ | | | | | |
| 17 | 釈迦堂遺跡 | 北割 | | | | | | | | | ○ |
| 18 | 米山A遺跡 | 北割 | | | | ○ | | | | | |
| 19 | 下の段遺跡 | 南割 | | ○ | | ○ | | | ○ | ○ | ○ |
| 20 | 五斤峠遺跡 | 新田 | | | | ○ | | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 21 | 松戸遺跡 | 南割 | | ○ | | ○ | | | ○ | ○ | ○ |
| 22 | 元宮神社東遺跡 | 北割 | | ○ | | ○ | | | ○ | ○ | ○ |
| 23 | 高河原遺跡 | 新田 | | | | ○ | | | | | |
| 24 | 上の宮遺跡 | 新田 | | | | | | | | | ○ |
| 25 | 下の宮遺跡 | 新田 | | | | | | | | | ○ |
| 26 | 駒潰遺跡 | 新田 | | | | ○ | | | | | ○ |
| 27 | 二ッヤ北遺跡 | 新田 | | | | ○ | ○ | ○ | | | |
| 28 | 二ッヤ遺跡 | 新田 | | | | ○ | ○ ○ | ○ | | | |
| 29 | 二ッヤ東遺跡 | 新田 | | | | ○ | | | | | |
| 30 | 三ッ塚上遺跡 | 新田 | | | ○ | ○ | ○ | ○ | | | |
| 31 | 三ッ塚中遺跡 | 新田 | | | | ○ | | | | | |
| 32 | 三ッ塚遺跡 | 南割 | | | | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | |
| 33 | 三ッ塚下遺跡 | 南割 | | | | ○ | | | | ○ | ○ |
| 34 | カラス林遺跡 | 南割・町 | | | | ○ | | | | | |
| 35 | 駒ケ原下遺跡 | 町 | | | ○ | ○ | | | | | |
| 36 | 駒ケ原東遺跡 | 町 | | | | ○ | | | | | |
| 37 | 滝ケ原遺跡 | 大久保 | | | | ○ | | | | | |
| 38 | 駒ケ原南遺跡 | 大久保 | | | ○ | | | ○ | ○ | | |
| 39 | 駒ケ原西遺跡 | 太田切 | | | ○ | | | | | | |
| 40 | 真米遺跡 | 北割 | | | | | | | | | |

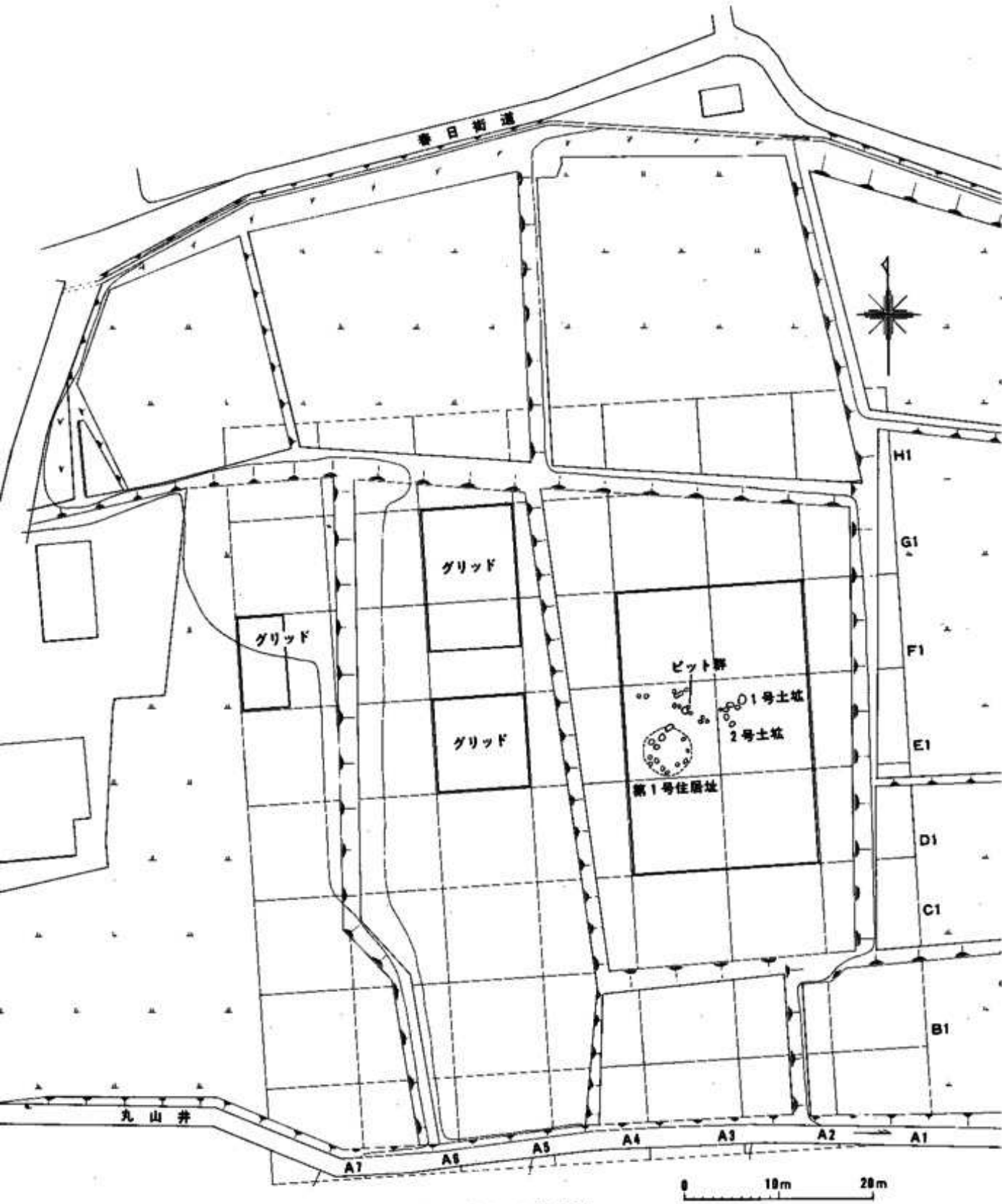

春日街道
グリッド
グリッド
グリッド
ピット群
1号土坑
2号土坑
第1号住居址
H1
G1
F1
E1
D1
C1
B1
丸山井
A7
A6
A5
A4
A3
A2
A1
0
10m
20m

図5　グリッド設定図

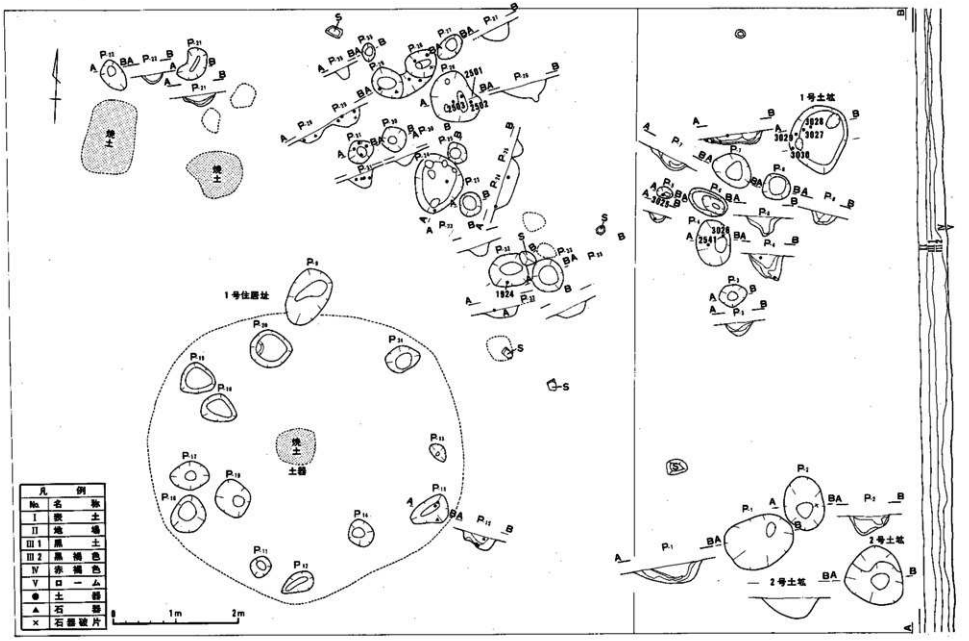

1号住居址
1号土坑
2号土坑
焼土
土器
凡例
No. 名称
I 表土
II 地場
III 1 黒土
III 2 黒褐色
IV 赤褐色
V ローム
● 土器
▲ 石器
× 石器破片
1m
2m

図6　遺構配置図

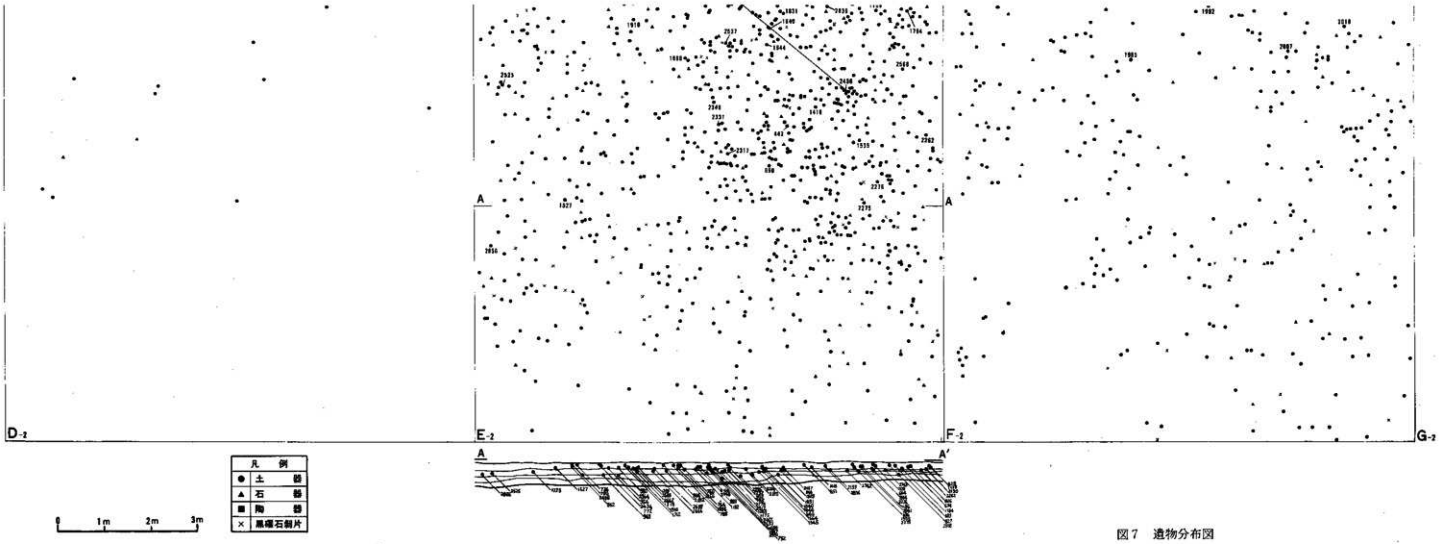



図7　遺物分布図

## 2．縄文時代の遺構と遺物

**第１号住居址**（図８）

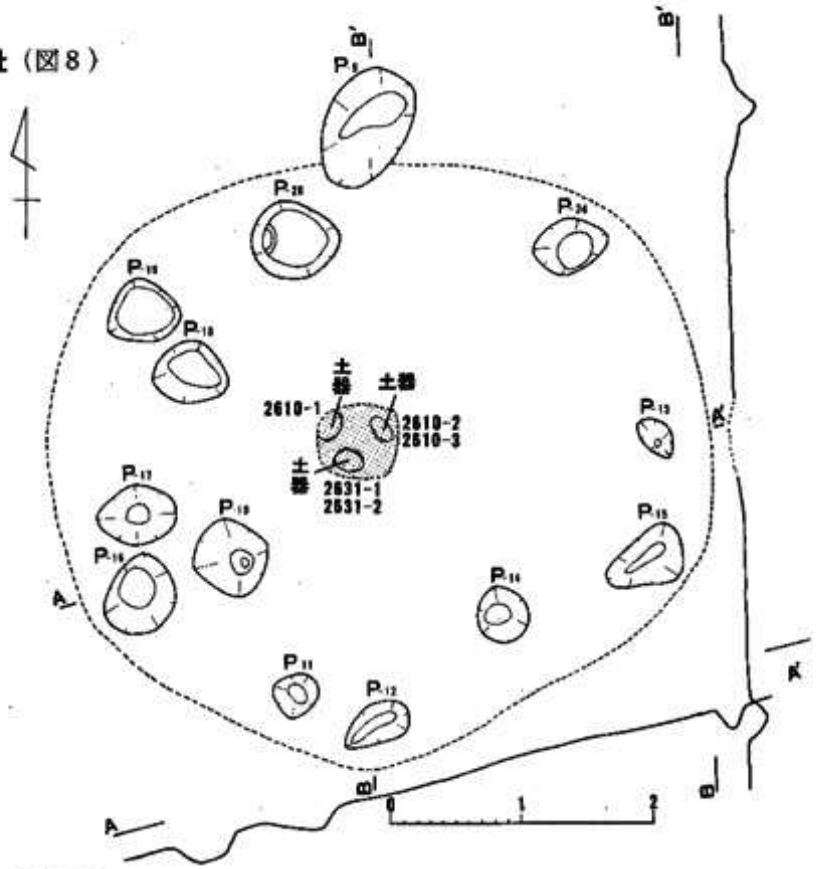



図８．第１号住居址

Ｅ－３グリッドの南西の位置に発見された遺構である。床面がローム直上にあったためプランを確認することができず、ローム層上に焼土と土器が集中した個所を中心として、経4.6～5.0mにピットが13個検出され住居址として確認するに至ったが、壁の輪郭はあきらかではない。

a．位置は、Ｅ－３グリッド内でもＤグリッドよりに発見された。

b．床面はロームに切り込まれていないので不明であるので、柱穴址の外周に点線で図示した。東西約５m・南北 4.6m不正円形である。

c．壁は確認する個所はなかった。

d．床面は、砂質のローム層を基盤しており、西側約半分は堅緻であったが、東側半分はわずか傾斜していて西側程堅緻ではない。

e．炉址は署中央にあって、直経約60cm円形で地床炉である。

f．ピット（表１）主穴と考えられるものはＰ－14・Ｐ－16・Ｐ－19・Ｐ－34の４柱穴と思われる。柱穴の形態はいずれも隋円形プランを呈し、長経外周で40～60cm・深さ14.5～16cmを測る。掘方は大きく掘っている。

**第1号　土壙**（図9）

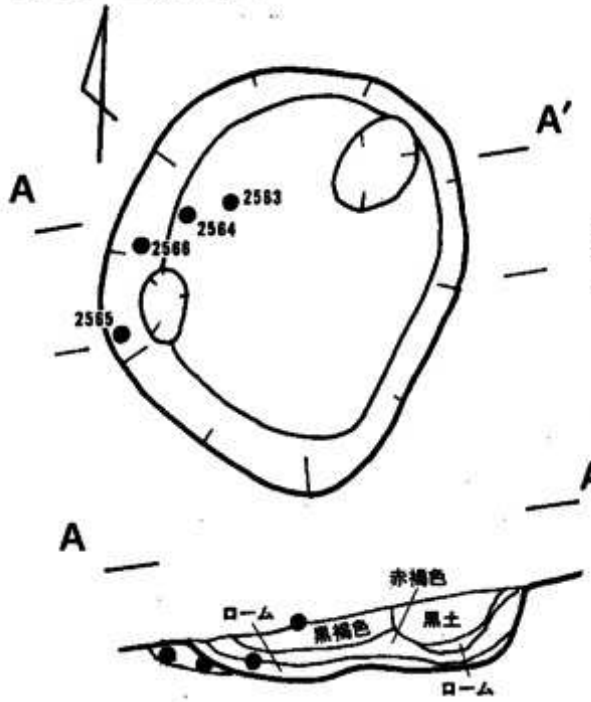



図9．第1号土壙　　S＝$\frac{1}{40}$

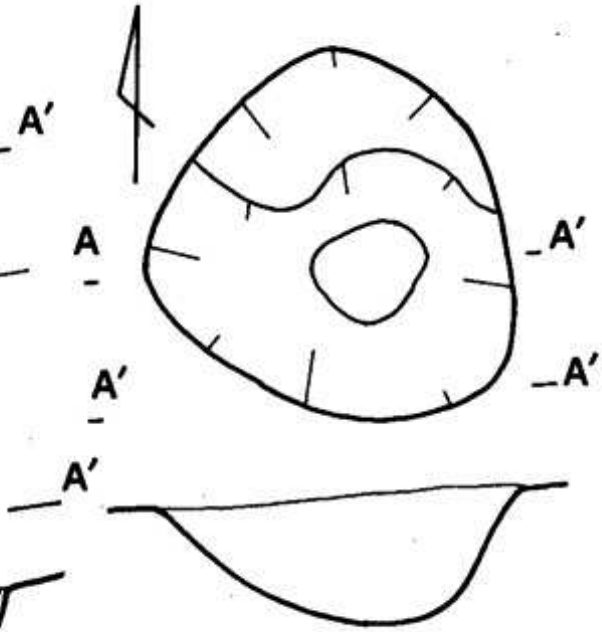



図10．第2号土壙　　S＝$\frac{1}{40}$

本遺跡で発見された土壙は、総数2基を数える。第1号土壙は、E－2グリッドの北側に発見、南北55cm・東西45cm・深さ14cm、隋円形の土壙である。土壙の検出はローム面から切り込まれているため遺物は堆積面の中より発見されたものに限定し、出土番号2563は土壙発見面黒褐色土層中から検出されたものを記録した。出土した土器2563·2565·2566は貝殻腹縁による条痕文土器、2564は無文土器で樫王式でも古い方に分類される土器である。本土壙は、こうした出土状況から縄文晩期樫王式の古い段階の時期と考えられる。

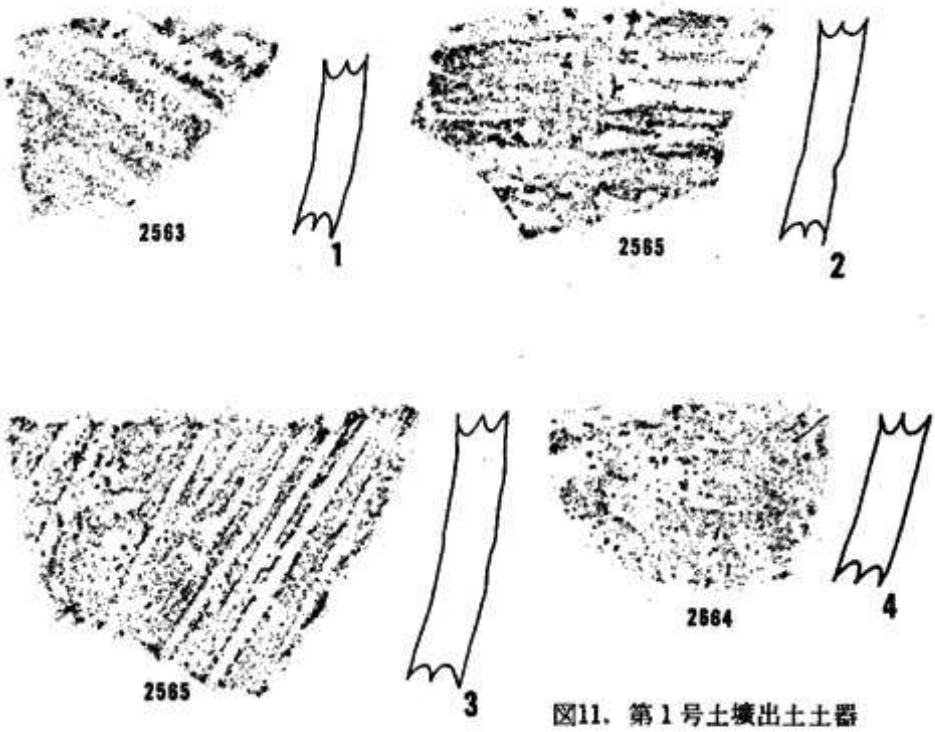



図11．第1号土壙出土土器

g．遺　物（図10）

遺物はあまり多くは出土しなかった。土器はほとんど小破片であって器形を知ることはできないものばかりである。(図16)は地床炉の上に発見された土器である。2はⅢ群に分類されるで縄文を施した磨削の甕形土器である。1.は甕形土器の胴部破片、器表面を削痕によって調整され砂粒の動きがうかがえる土器である。3.は条痕の施された深鉢土器。4・5は横位と縦位に条痕を施したⅣ群の内では新しい方の土器である。こうした遺物の出土状況から、本遺跡Ⅲ群～Ⅳ群の土器であることが知られる。

**第1号土壙出土遺物**（図11）

1.は斜位に浅い条痕文が施された深鉢形土器の破片。2.は条痕を横位に施した深鉢形土器。3.は斜位に条痕を施した深鉢であろう。4.は無文の甕形土器と考えられる。

（表1）第1号住居址内ピット一覧表

| ピットNo. | 平　面 | 規模cm | 深さcm |
|---|---|---|---|
| 9 | 隋　円 | 90×60 | 26 |
| 10 | 円　形 | 56×56 | 32.5 |
| 11 | 〃 | 36×30 | 15 |
| 12 | 隋　円 | 54×30 | 12.5 |
| 13 | 〃 | 36×24 | 17 |
| 14 | 円　形 | 46×44 | 26 |
| 15 | 〃 | 50×50 | 28.5 |

| ピットNo. | 平　面 | 規模cm | 深さcm |
|---|---|---|---|
| 16 | 隋　円 | 60×50 | 16 |
| 17 | 〃 | 60×48 | 18.5 |
| 18 | 〃 | 60×46 | 20.5 |
| 19 | 円　形 | 92×92 | 14.0 |
| 20 | 〃 | 64×58 | 14.5 |
| 34 | 隋　円 | 60×40 | 12 |

## 3．ピット群　ピット一覧表

ピットは総計22基である。円形9基・隋円形13基を数える。規模は 110～90cmまで6基、89～60cmまでのもの7基、59～30cmまで9基である。ピットの検出面はローム層で確認された。

ピット一覧表（表1）

| 番号 | 発掘番号 | 平面形 | 規模cm | 深さcm |
|---|---|---|---|---|
| 1 | 1 | 隋円形 | 100×80 | 3 |
| 2 | 2 | 〃 | 90×62 | 47 |
| 3 | 3 | 円　形 | 110×40 | 16 |
| 4 | 4 | 隋円形 | 70×60 | 73 |
| 5 | 5 | 円　形 | 30×20 | 12 |
| 6 | 6 | 隋円形 | 60×40 | 33 |
| 7 | 7 | 〃 | 70×50 | 16 |
| 8 | 8 | 円　形 | 45×45 | 20 |
| 9 | 21 | 隋円形 | 56×30 | 10.5 |
| 10 | 22 | 〃 | 60×40 | 14.5 |
| 11 | 23 | 〃 | 40×40 | 16 |

| 番号 | 登録番号 | 平面形 | 規模cm | 深さcm |
|---|---|---|---|---|
| 12 | 24 | 隋円形 | 100×80 | 18 |
| 13 | 25 | 円　形 | 40×30 | 13 |
| 14 | 26 | 〃 | 90×70 | 45 |
| 15 | 27 | 隋円形 | 60×50 | 21 |
| 16 | 28 | 円　形 | 60×50 | 20 |
| 17 | 29 | 隋円形 | 60×50 | 13 |
| 18 | 30 | 円　形 | 50×40 | 13 |
| 19 | 31 | 隋円形 | 50×40 | 23 |
| 20 | 32 | 円　形 | 90×60 | 14 |
| 21 | 33 | 〃 | 54×50 | 14 |
| 22 | 35 | 隋円形 | 30×20 | 16 |

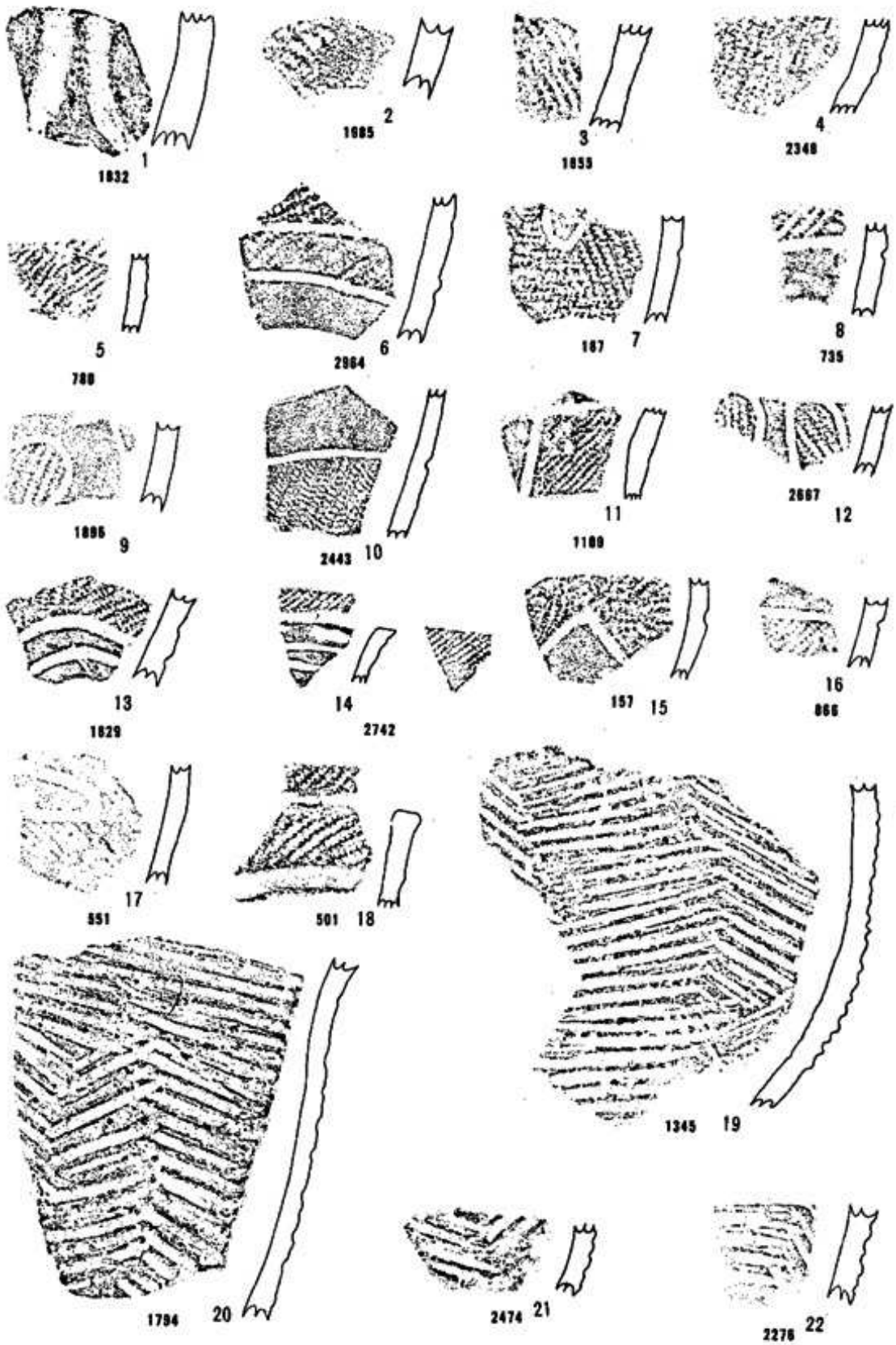



図12　第Ⅰ・Ⅱ・Ⅳ群土器（$\frac{1}{2}$）

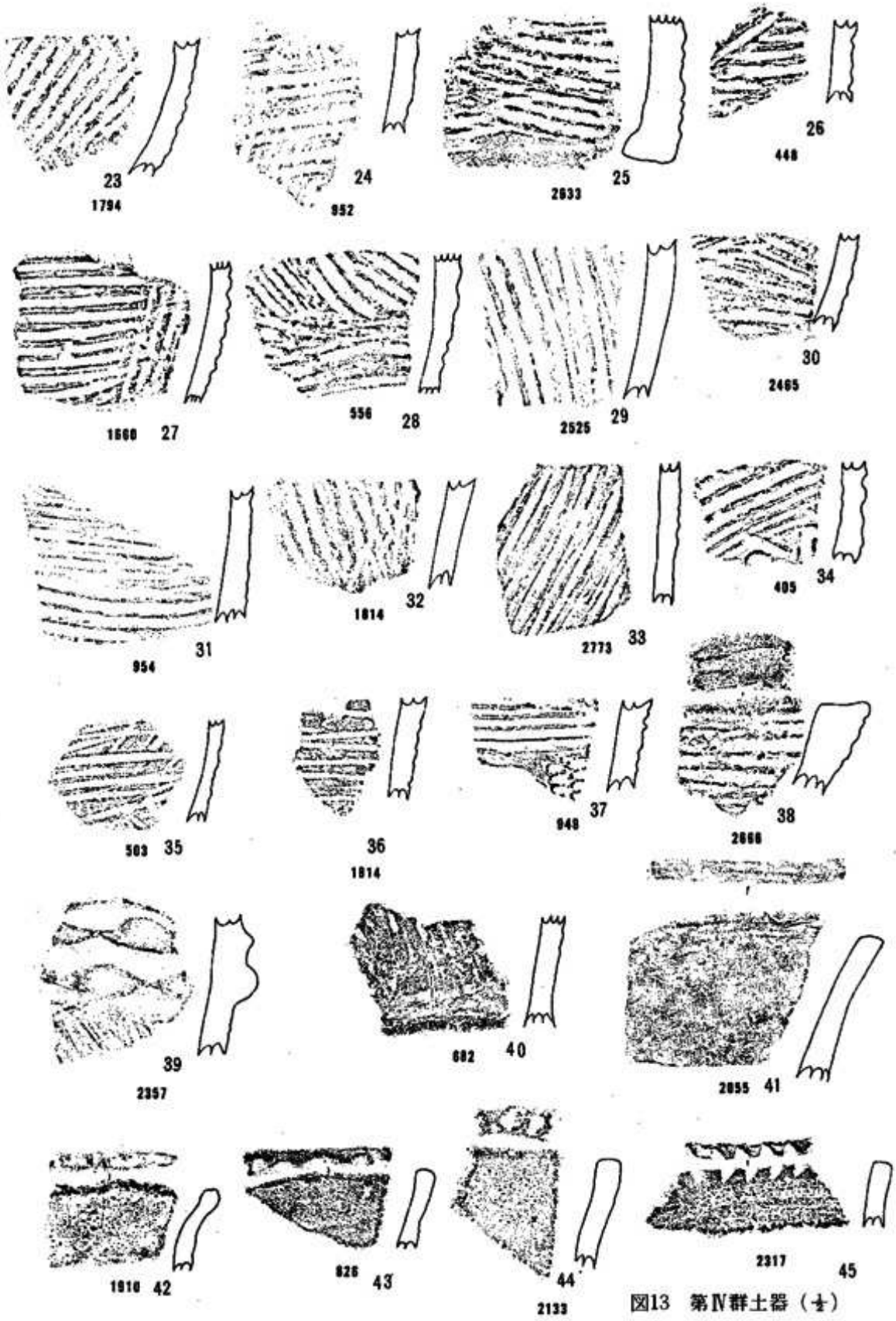

23
1794
24
852
25
2633
26
448
1568
27
556
28
2525
29
30
2465
954
31
1814
32
2773
33
405
34
503
35
36
1814
948
37
38
2868
39
2357
682
40
2855
41
1810
42
826
43
44
2133
2317
45

図13　第Ⅳ群土器（½）

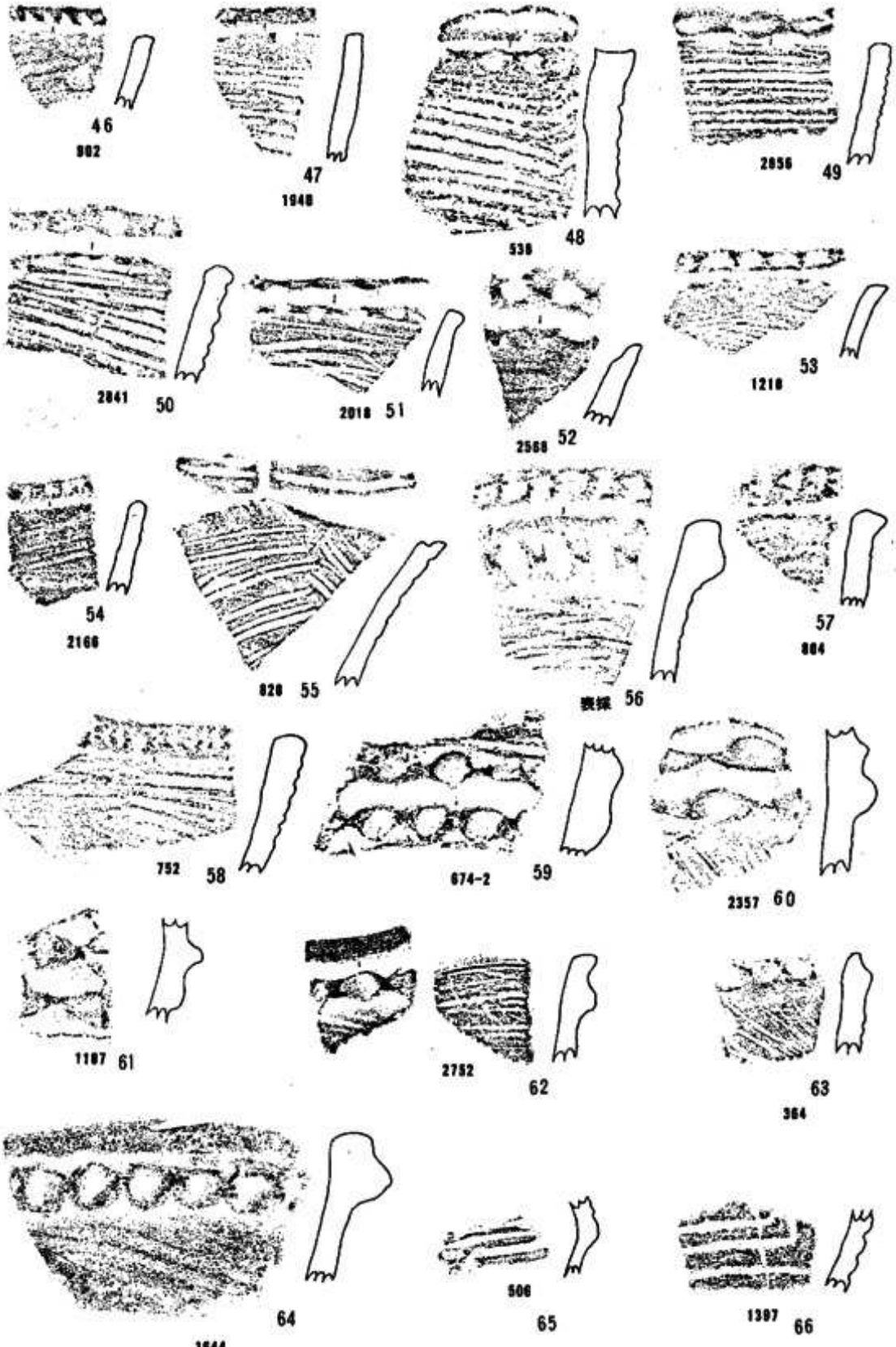



図14　第Ⅳ群土器（$\frac{1}{3}$）

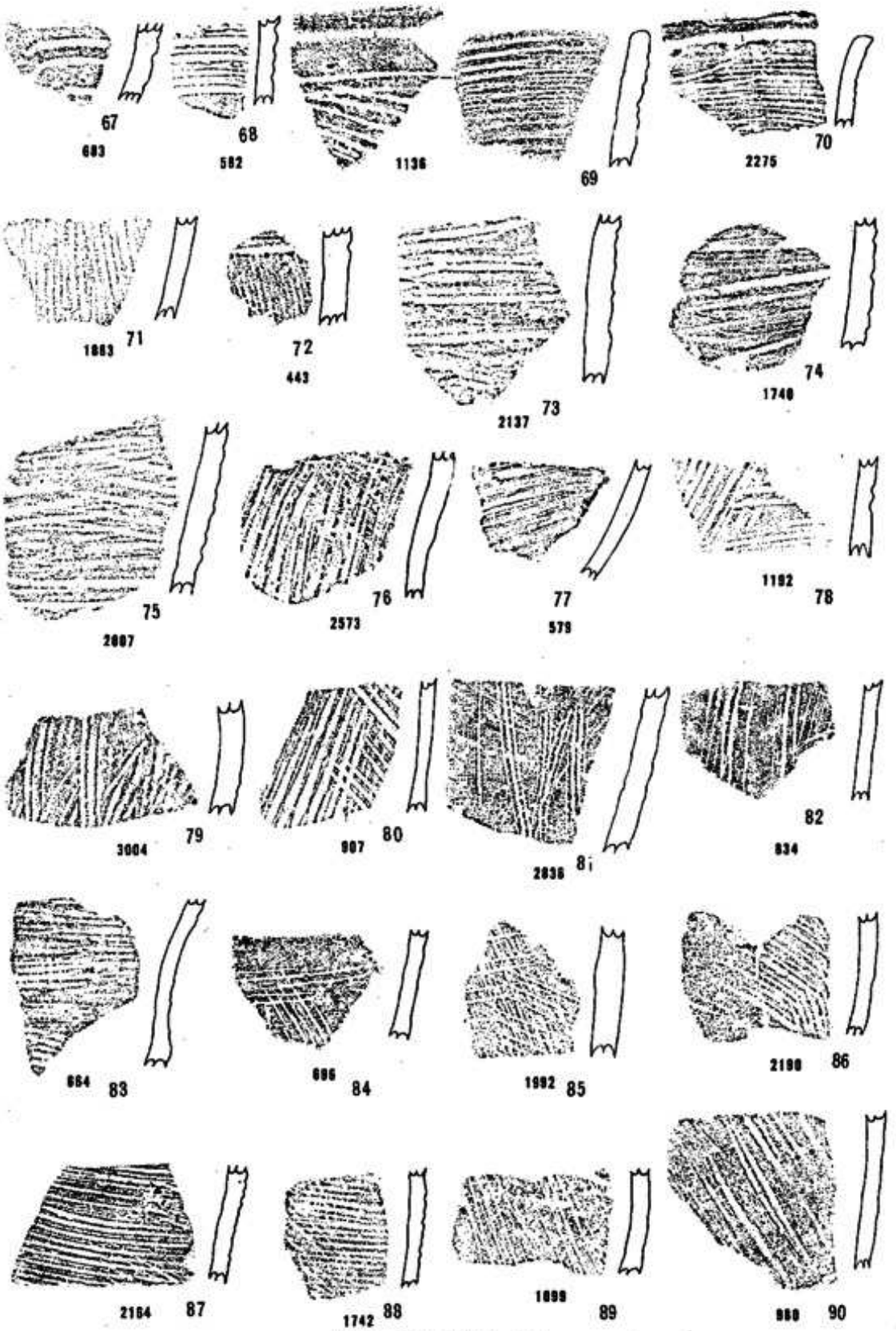
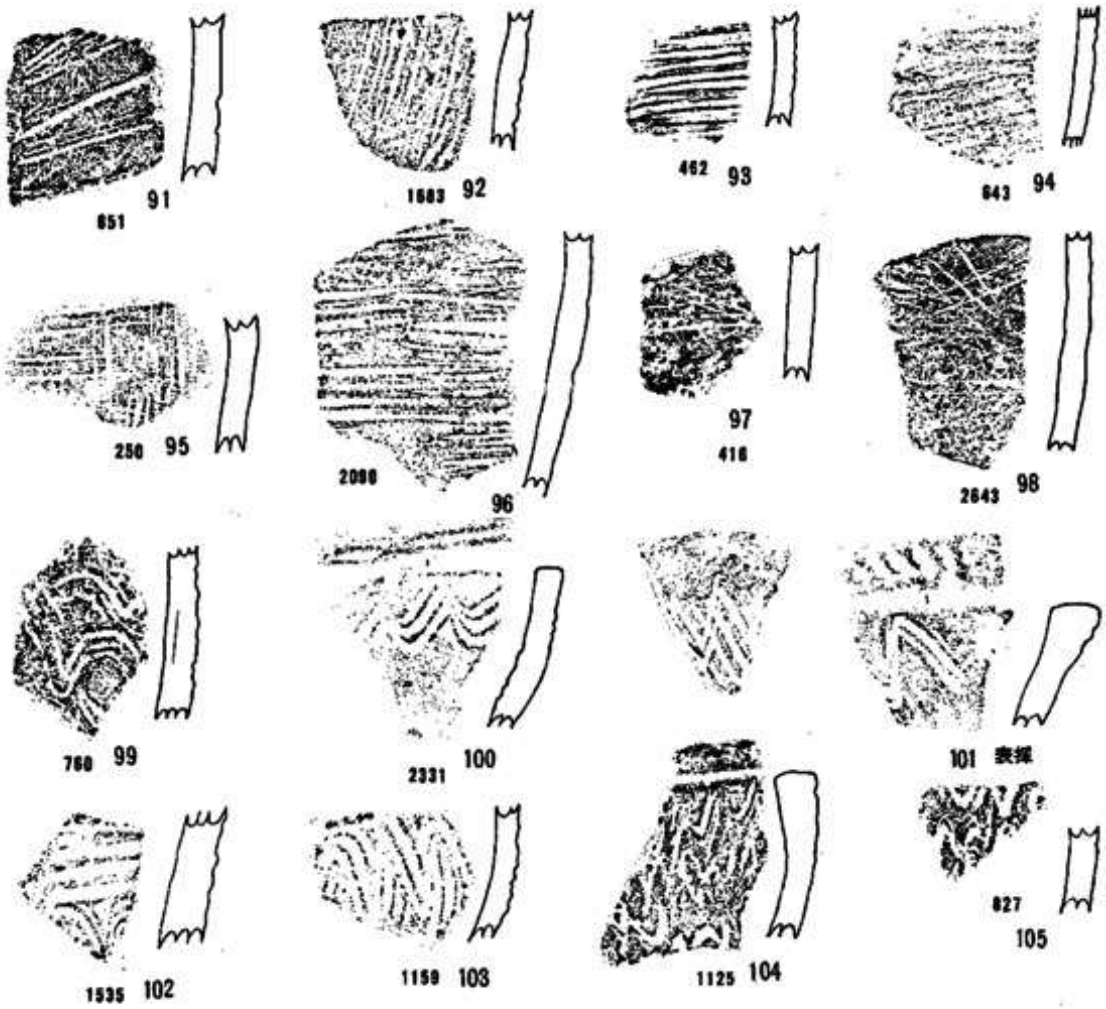
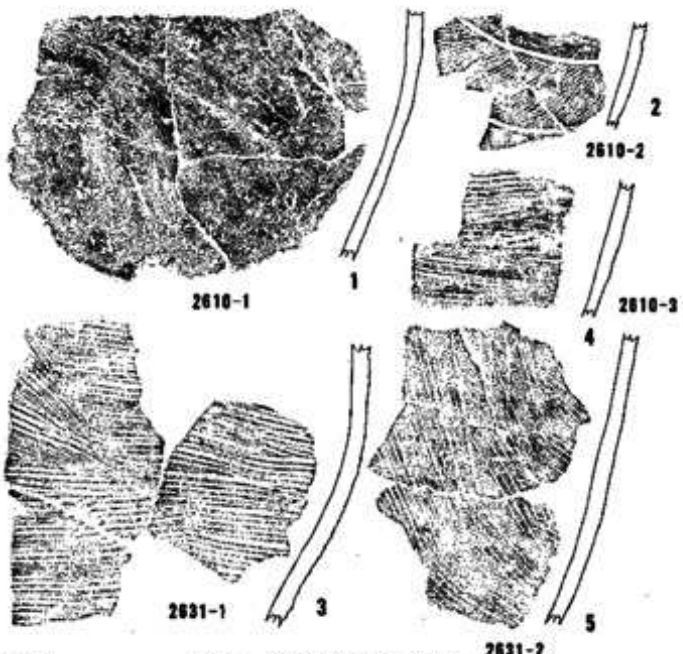



図15　第Ⅳ群土器（$\frac{1}{2}$）




第1号住居址　　図16　第V群土器（$\frac{1}{4}$）

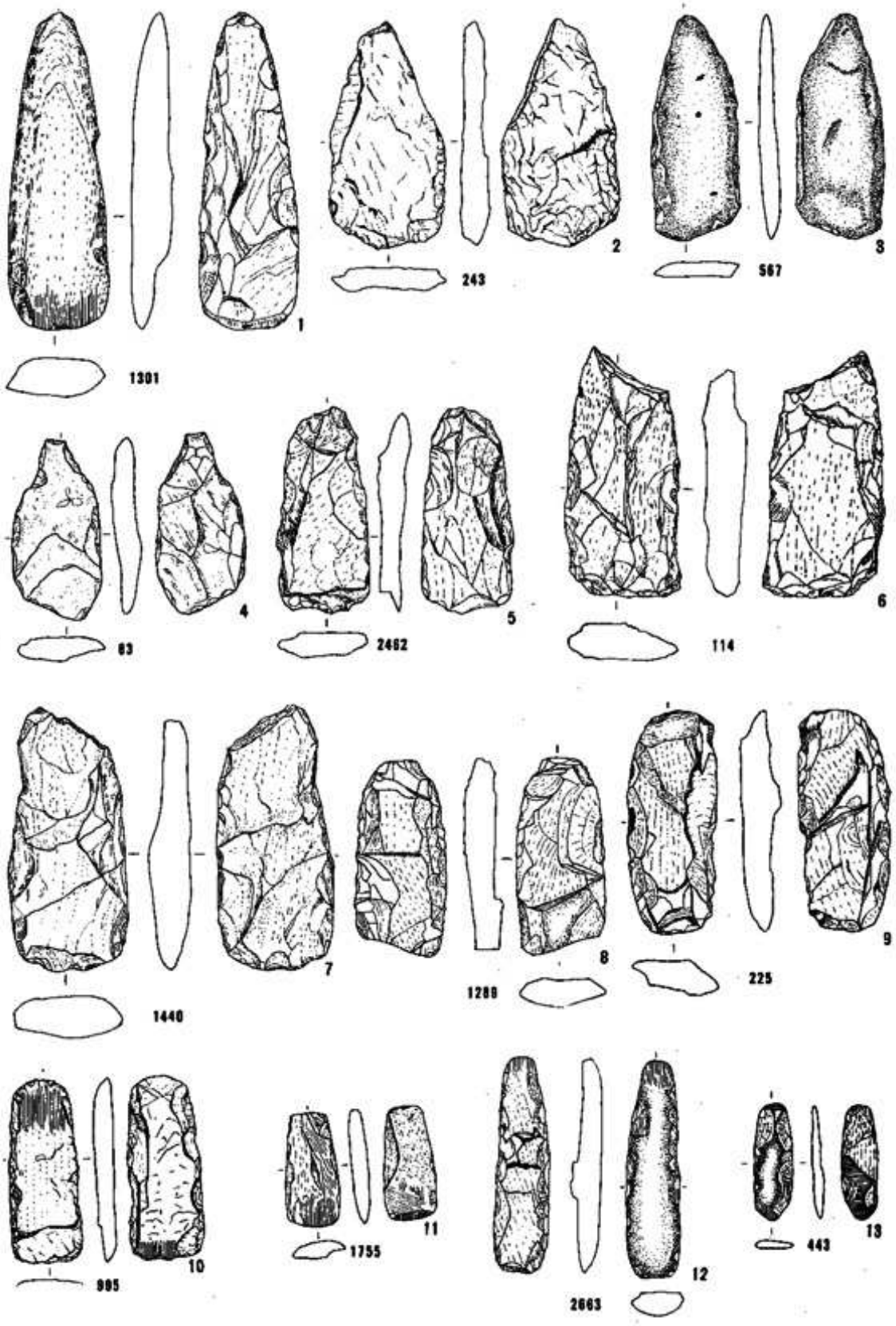



図17　打製石斧実測図（$\frac{1}{3}$）

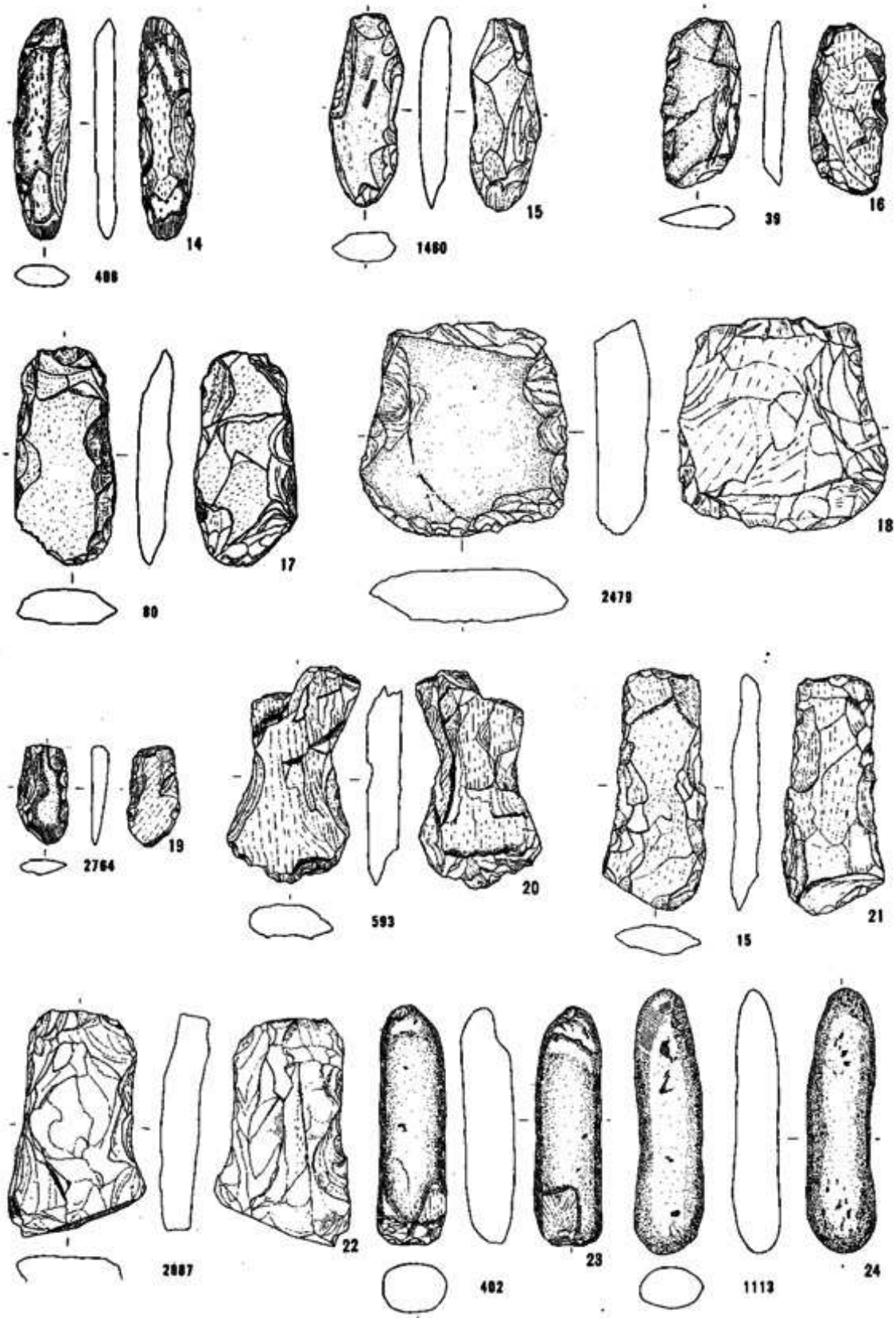



図18　打製石斧・磨製石斧実測図（$\frac{1}{3}$）

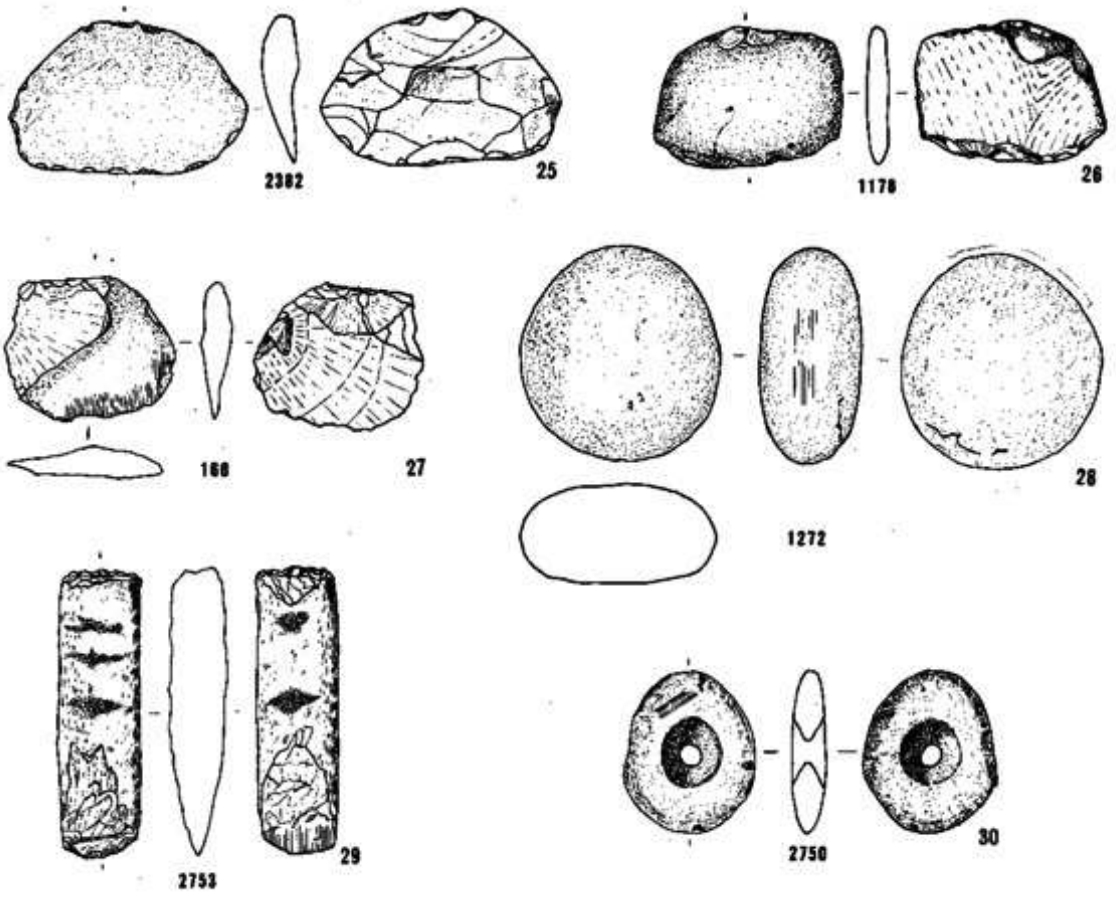



図18　打製石斧・磨製石斧実測図（$\frac{1}{3}$）

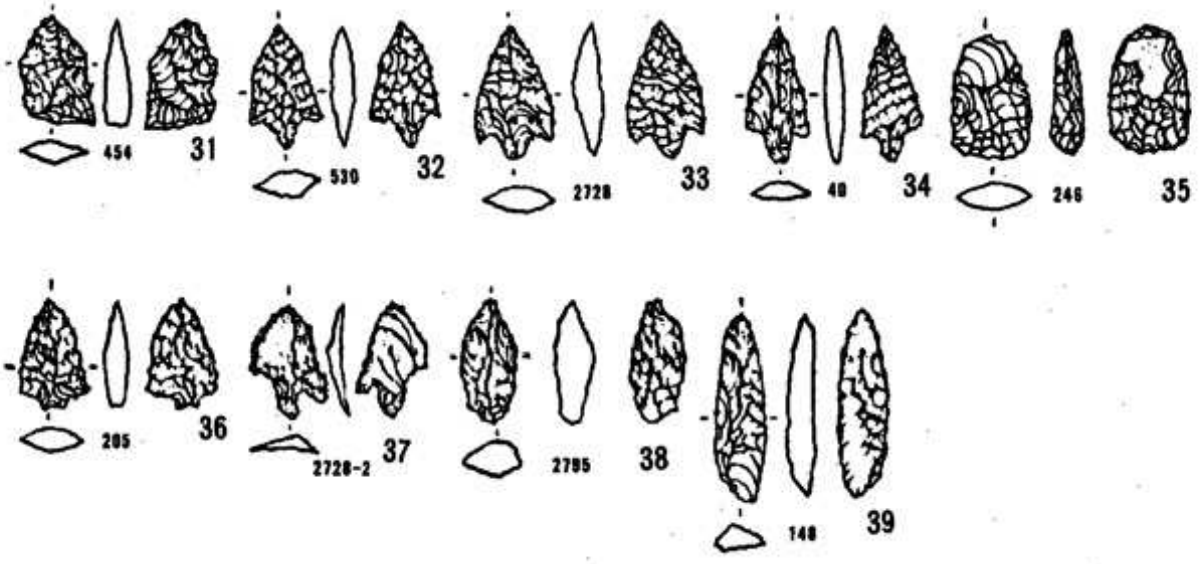



図19　横刃・摘打器・磨製石斧・環石・石錘

## 4. 遺　　物（図12）

### 1　土器（図12）

今回の調査によって出土した土器はこの時期としては多いほうである。しかしながら大方が小破片であって、その性格さを明らかにすることができ得ない。確認された土器はⅠ・Ⅱ群は非常に少ない。第Ⅰ群土器は縄文中期後葉、第Ⅱ群土器は縄文後期に属するものである。

確認された土器はⅠ～Ⅳ群にわけ以下述べることにする。Ⅰ・Ⅱ群は前述のとおり、Ⅲ群は縄文晩期で縄文を施した土器、Ⅳ－Ⅴは東海地方の影響を受けた条痕文土器のⅤ群、Ⅳ－２条の沈線を施した土器である。

**(1)第Ⅰ群土器**（図12）

縄文時代中期に属するものである。1.は低い隆帯を施した深鉢形土器、２・３・４は斜縄文を施した深鉢形の土器破片である。

**(2)第Ⅱ群土器**（図14）

本群は縄文時代後期の土器片である。５～18は磨消が窺える深鉢形土器の破片である。

**(3)第Ⅲ群土器**（図11）

本群は縄文時代晩期に属するもので、2. 大洞A式に位置けられるものと思われる。

**(4)第Ⅳ群土器**（図12・13・14・15・16）

本群の土器はゆわゆる条痕文を主体とする東海系の土器である。19～38・47までは条痕の施された深鉢で、口縁部に刻目が施こされることのない土器である。39はII縁部に近い破片と思われるが二段に隆帯がめくらされ連続に指頭痕がめぐらされ、下部に条痕が施されている特徴のある土器である。39の外に59・60・61がある。　問題のある土器である。40は擦痕のある土器で、Ⅳ群１の中に入るものと考えられる。41は無文で口縁部に刻目の付していないもの。42・43・44・45・46は口縁部に刻目が施されている土器。47は条痕で口縁部無文。48～51・63は条痕でII縁部に連続指頭痕が施された土器。52は無文で口縁部に指頭痕があるもの。53・54・58は器壁は条痕が施され口縁部は櫛状器具で押引文が施されているもの。55は太い波線で施文され口縁部に一本の波線が引かれ波状口縁の土器と思われるもの、56は器面は条痕口縁端に厚い隆帯をめぐらしやゝ太い連続指頭痕が施され、口縁部には櫛状器具で押引文が施されているもの。62は裏面に条痕が施されている土器。64は口縁部に大形の指頭痕をめぐらしたもの。65～68は沈線文で区画された土器時期は古い方に属するものではなかろおか。69～94・96は条痕文土器。95・97・98は条線文土器。

**(5)第Ⅴ群土器**（図16）

本群の土器中段99～105は、櫛状器具によって施文された波状文の土器である。　下段第１号住居址出土土器。

**石　器**（図17・18・19）

今回の調査で出土した石器は総数で 251点である。縄文時代中期後葉・後期の遺物は量的にみて非常に少ないところより、石器はⅢ～Ⅳ群に伴出するものと思われる。このためこゝでは一括して報告することにする。 251点の打訳は打製石斧69点で、そのうち図示したのは22点で、他は破片のため図示しなかった。乳棒状石器４点・横刃形石器３点・磨石４点・環石１点・磨製石器１（石剣利用）・破片24点・石匙２点・石鏃14点・掻器 129点が出土した。

**1．打製石斧**（図17・18・19）

打製石斧は69点出土している。撥形４点・短冊形13点・分胴形３点で完形品は20点、他は破片のため図示しなかった。

a－a類（３）

両面に自然面を持つもので、撥形で斜刃である。

a－b類（１）

片面に自然面を持つもので、撥形円刃

a－c類（２・４）

両面に自然面を持たないもので、撥形円刃

b－a類（14）

両面に自然面を持っているもので、短冊形円刃

b－b類（10・11・17）

片面に自然面を残している短冊形直刃

b－c類（５・６・12）

両画に自然面をもたない短冊形直刃

b－d類（７・９・13）

両面に自然面をもたない短冊形円刃

b－e類（８・15）

両面自然面を残さない短冊形斜刃

b－f類（16）

片面に自然面を持つ短冊形斜刃

c－a類（18・19）

片面に自然面を残している分胴形円刃

c－b類（20）

両面に自然面を残さない分胴形円刃

c－c類（21・22）

両面に自然面を持たない分胴形斜刃

d－a類（23・24・25・27）

両面自然面のある乳棒状石器

e－a類（26）

石剣の破片を利用した磨製石斧

F－類　28・29・30

片面に自然面を残している横刃形石器

G－類（31）

磨石

H－類（32）

環石

I－類（33・34・35・36・37・38・39・40・41）

石鏃は全部で14点出土したが、図示したものは内9点である。

（表3）石器一覧表

| 番号 | 出土番号 | 器種 | 長 mm | 巾 mm | 厚 mm | 重 g | 石質 | 完・破 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 1301 | 打製石斧 | 152 | 54 | 10.9 | 190 | 緑色岩 | 完 |
| 2 | 243 | 打製石斧 | 108 | 54.4 | 14.2 | 100 | 硬沙岩 | 破 |
| 3 | 567 | 打製石斧 | 109 | 40.1 | 9.0 | 60 | 硬沙岩 | 完 |
| 4 | 83 | 磨製打斧 | 86 | 42.0 | 13.0 | 50 | 硬沙岩 | 完 |
| 5 | 2462 | 打製石斧 | 94.4 | 43.6 | 10.1 | 60 | 硬沙岩 | 完 |
| 6 | 114 | 磨製打斧 | 109 | 50.5 | 10.8 | 190 | 緑色岩 | 完 |
| 7 | 1404 | 打製石斧 | 101.7 | 55.4 | 20.1 | 170 | 硬沙岩 | 完 |
| 8 | 1289 | 打製石斧 | 90.42 | 40.1 | 10.62 | 90 | 緑色岩 | 完 |
| 9 | 225 | 磨製打斧 | 106.2 | 40.42 | 10.85 | 100 | 硬沙岩 | 完 |
| 10 | 995 | 打製石斧 | 87.4 | 34.3 | 9.0 | 50 | 緑色岩 | 完 |
| 11 | 1755 | 打製石斧 | 53.1 | 25.8 | 7.0 | 20 | 緑色岩 | 完 |
| 12 | 2663 | 磨製打斧 | 105.5 | 25.25 | 13.4 | 50.5 | 緑泥変磨岩 | 完 |
| 13 | 433 | 磨製石斧 | 55.8 | 17.2 | 5.4 | 10 | 緑色岩 | 完 |
| 14 | 406 | 打製石斧 | 106.2 | 25.4 | 9.0 | 50 | 緑色岩 | 完 |
| 15 | 1460 | 磨製石斧 | 92.89 | 31.65 | 14.8 | 60 | 緑泥岩 | 破 |
| 16 | 39 | 打製石斧 | 82.8 | 37.8 | 12.89 | 50 | 硬沙岩 | 完 |
| 17 | 80 | 磨製打斧 | 104.4 | 47.4 | 15.3 | 120 | 緑泥岩 | 完 |
| 18 | 2479 | 打製石斧 | 104.5 | 97.4 | 28.4 | 370 | 硬沙岩 | 破 |
| 19 | 2764 | 小形磨製石斧 | 47.55 | 21.2 | 8.1 | 10 | 緑泥岩 | 破 |
| 20 | 593 | 磨製打斧 | 105.8 | 57.65 | 17.6 | 120 | 緑泥岩 | 完 |
| 21 | 15 | 打製石斧 | 101.5 | 47.85 | 13.2 | 100 | 硬沙岩 | 完 |
| 22 | 2887 | 打製石斧 | 108.2 | 66.6 | 19.6 | 200 | 硬沙岩 | 完 |
| 23 | 402 | 磨製石斧 | 105.8 | 30.1 | 23 | 170 | 緑色岩 | 完 |
| 24 | 1113 | 磨製石斧 | 127.6 | 30.2 | 24 | 170 | 緑色岩 | 完 |
| 25 | 2382 | 石匙 | 89.4 | 56 | 13.6 | 60 | 硬沙岩 | 完 |
| 26 | 1178 | 石匙 | 72.8 | 53.2 | 8.3 | 50 | 硬沙岩 | 完 |
| 27 | 160 | 石匙 | 63.8 | 52.4 | 12.4 | 50 | 緑色岩 | 完 |
| 28 | 1272 | 敲打器 | 80.2 | 70.4 | 30.8 | 350 | 花崗変磨岩 | 完 |
| 29 | 2753 | 磨製石斧 | 109 | 30 | 21 | 130 | 粘板岩 | 完 |
| 30 | 2750 | 環石 | 61.1 | 40.5 | 10.3 | 60 | 沙岩 | 完 |
| 31 | 454 | 石鏃 | 20 | 10.2 | 4.0 | 0.8 | 黒曜石 | 有舌欠損 |
| 32 | 530 | 石鏃 | 22.0 | 12.8 | 4.0 | 0.8 | 黒曜石 | 完 |
| 33 | 2728-1 | 石鏃 | 23.4 | 14.6 | 4.0 | 1.2 | 黒曜石 | 完 |
| 34 | 40 | 石鏃 | 24.4 | 11.4 | 3.4 | 0.8 | 黒曜石 | 完 |
| 35 | 246 | スクレパー | 22.2 | 14.0 | 5.6 | 0.8 | 黒曜石 | 完 |
| 36 | 205 | 石鏃 | 18.8 | 12.8 | 4.6 | 0.7 | 黒曜石 | 有舌欠損 |
| 37 | 2728-2 | 石鏃 | 20.0 | 13.5 | 2.9 | 0.4 | 黒曜石 | 完 |
| 38 | 2795 | 石鏃 | 21.7 | 10.0 | 7.4 | 1.3 | 黒曜石 | 完 |
| 39 | 148 | 石錐 | 33.0 | 9.0 | 5.0 | 1.3 | 黒曜石 | 完 |

# Ⅳ. 調 査 ま と め

本遺跡のまとめにあたって調査の方法を先に明かにしておくことが必要であろうと思う。この遺跡の発見されたのは大正初年頃山林を伐採して水田造成が行われた時点で確認された遺跡である。この開田が相当規模の大きなものであったとみえ、水田はロームを相当切取ローム直上に地場層を作ってある個所が大分部であることが確認されたので、地場下直下に黒色土層の残っている個所に調査区域を設定せざるを得ない結果となったのである。従って調査はE-2・E-3グリッドを中心とした範囲に限定されることになった。調査は堆積された層を5層に区分して行なわれたのであるが出土した遺物は周辺より流込んだものであるため層序による分類は不可能となったので、在来の編年による分類にとどまった。

1. 本遺跡では住居址1軒を確認できたことは大きな発掘の成果と云わなくてはならない。

2. 出土土器について。

こゝでは出土した土器を5群に分けて説明してきたが、本遺跡の主体を占めるⅣ・Ⅴ群の土器について若干ふれてみると、土器の多くが細片・そして無文のものが多いため器体を明確にすることはでき得ない点もあり、また誤りもあろうと思われる。

Ⅲ群土器として明確なものは（図11-2）のみで、これは住居址の炉址内から出土した擦痕文の土器と伴出した唯一の土器で大洞Aに比定されるものと思われる。

Ⅳ群土器は条痕文を主体とする土器で、東海地方との関連のあるものとして注目される土器である。このⅣ群の土器は更に新古に細別することができる。古い方は口縁部が無文で頸部～胴部に条痕が施されているもの。新しいと考えられるものは、口縁部に刻目が押引文又は連続指頭痕などが施された一群がその範中に入るものと考えられる。

Ⅴ群の土器は（図18—99～105）までの土器で（図14—55）の口縁部に一条の沈線が施されている特色のある土器にその類例求めることができるところより、この時期に入れてよいと考えられる。

本遺跡の時期的位置は、以上の資料から縄文晩期樫王式の時期とみることができる。

※1．丸山敵一郎「長野県下伊那郡天竜村平岡南遺跡出土遺物について」信濃第18巻第4号・昭和41年

※2．永峯光一「氷遺跡の調査とその研究」—石器時代第9号・昭和44年

※3．稲垣甲子男・他「駿河山王—静岡県富士川町山王遺跡群調査報告書」富士川教育委員会

※5．小松原義人・他「新井南遺跡」中央道埋蔵文化財調査報告書　日本道路公団・長野県教育委員会　昭和51年

※6．吉村進「湯原遺跡—大城林・北方Ⅰ・Ⅱ射殿城・南原・横前新田・塩木・北原・富士山緊急発掘調査報告書」—駒ケ根市教育委員会・南信土地改良事務所　昭和49年

※7．伊藤修「2.うどん坂Ⅱ遺跡」47年長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書・伊飯町内3　日本道路公団・長野県教育委員会　昭和48年

※8．気賀沢進・他「荒神沢遺跡」南信土地改良事務所・駒ケ根市教育委員会　昭和53年

# V. おわり

二ッヤ遺跡の発掘調査は予想以上の成果をあげることができて終った。ここに小報告書の刊行をみることができました。

縄文時代晩期末葉の住居址の発見は、先に発見された荒神沢遺跡(駒ケ根市)・高尾第二遺跡（飯島町）とあわせて上伊那郡では3軒の住居址が発見されたことは、地域の縄文晩期の研究上大きな意義をもつことになった。これら住居址は黒色土層直下にいずれも作られていることから平地住居址の可能性も考えられる。

本遺跡出土の上器は、飯島町高尾第二遺跡と類似しているが、宮田村と飯島町との間にある荒神沢遺跡では氷遺跡出土の土器に比定される土器と、東海系条痕文をもつ土器が出土しているのに対し、二ッヤ遺跡・高尾第二遺跡では氷遺跡の土器は一片も出土しなかったことは、いろいろの問題と疑問を投げかけることになった。

宮田村には、このほかに真米遺跡・田中下遺跡・中越遺跡等があり、いずれの遺跡からも80～85%以上の西日本・東海系の土器が出土している。今後これ等遺跡を集成して地域の研究に資したいと思っている。

調査期間中及整理作業には、根津清志氏をはじめ東野広次・下島早苗・白鳥あき子・保科徳子の皆さん、とりわけ、紅村　弘氏・岩野見司氏・小坂町教育委員会の御教示をいただきました。

こゝに記して、感謝申しあげ終りといたします。　　友野

# 図　　版

図20　二ッヤ遺跡遠影

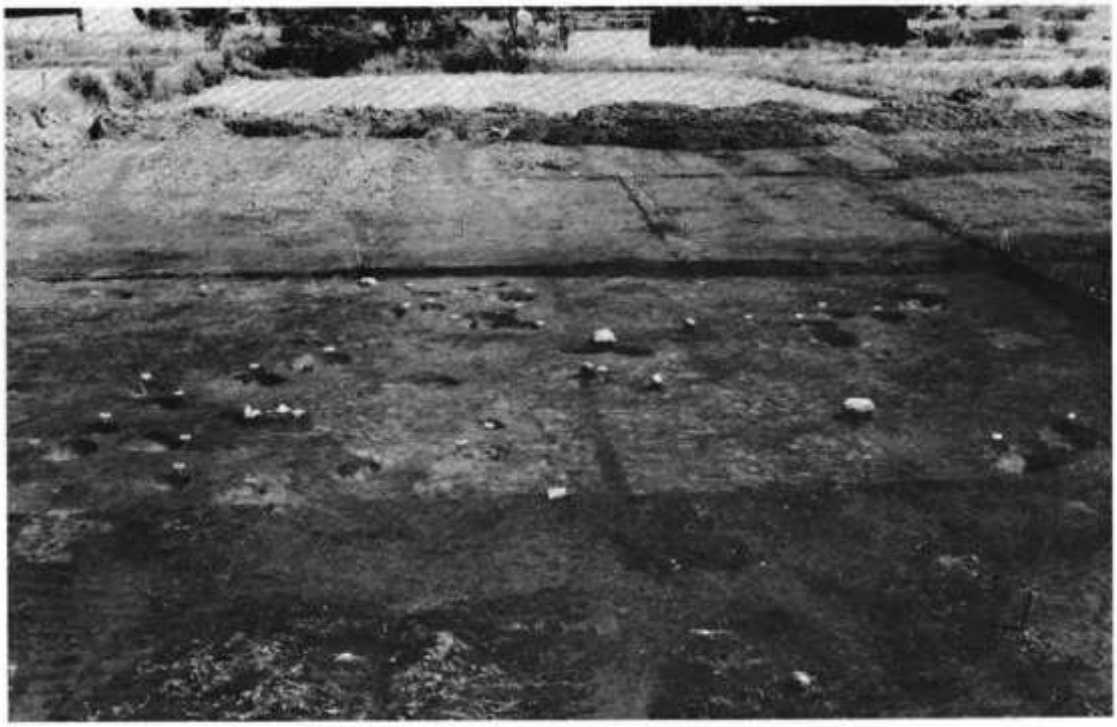


図21　二ッヤ遺跡遺構

図22　ニッヤ遺跡発掘状況

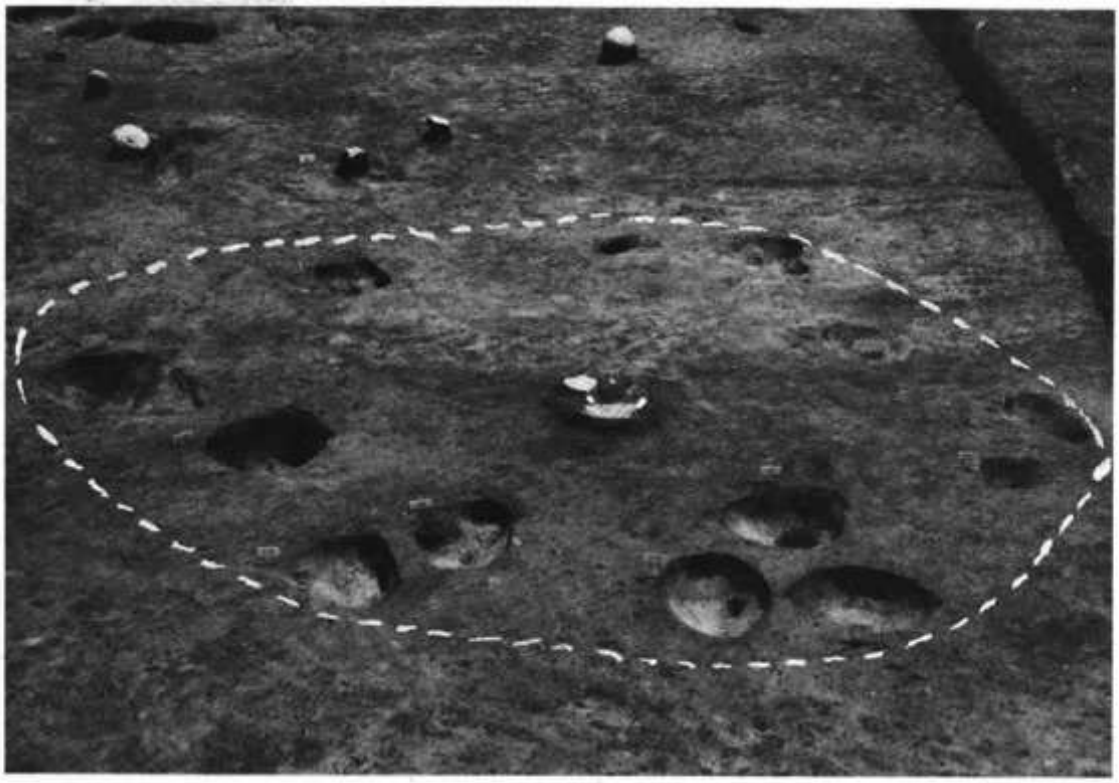


図23　第1号住居址

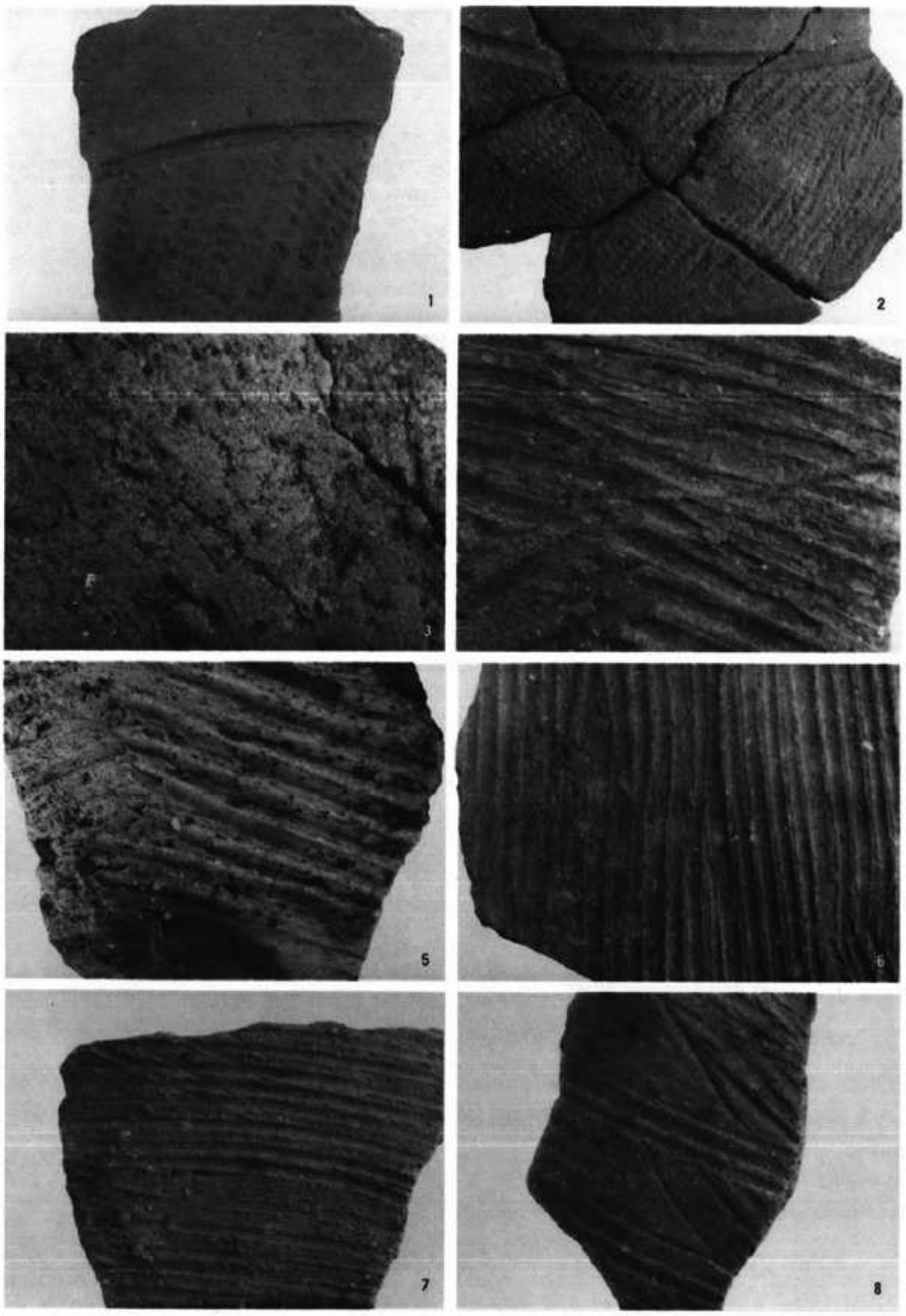



図24　第Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ群土器

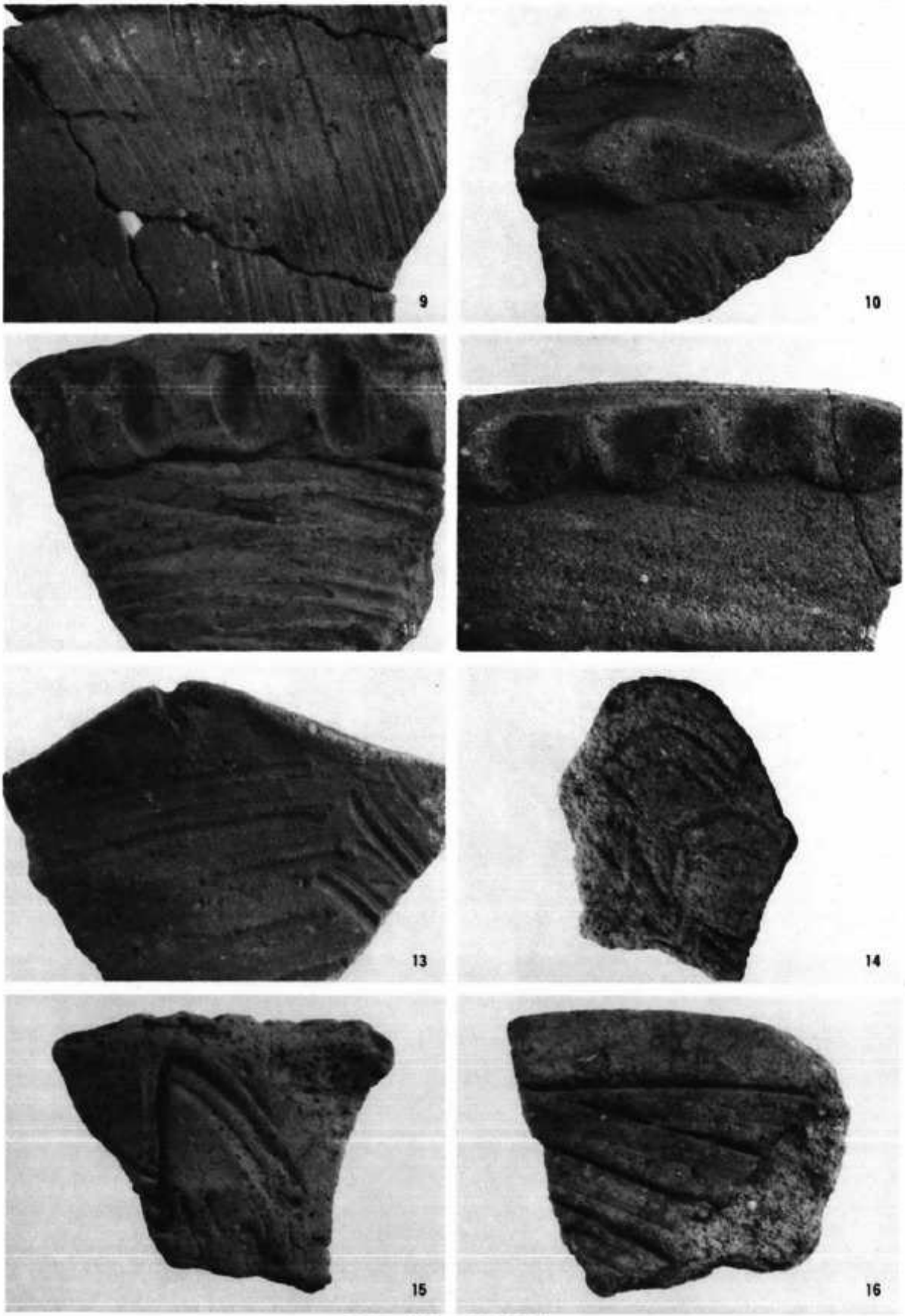
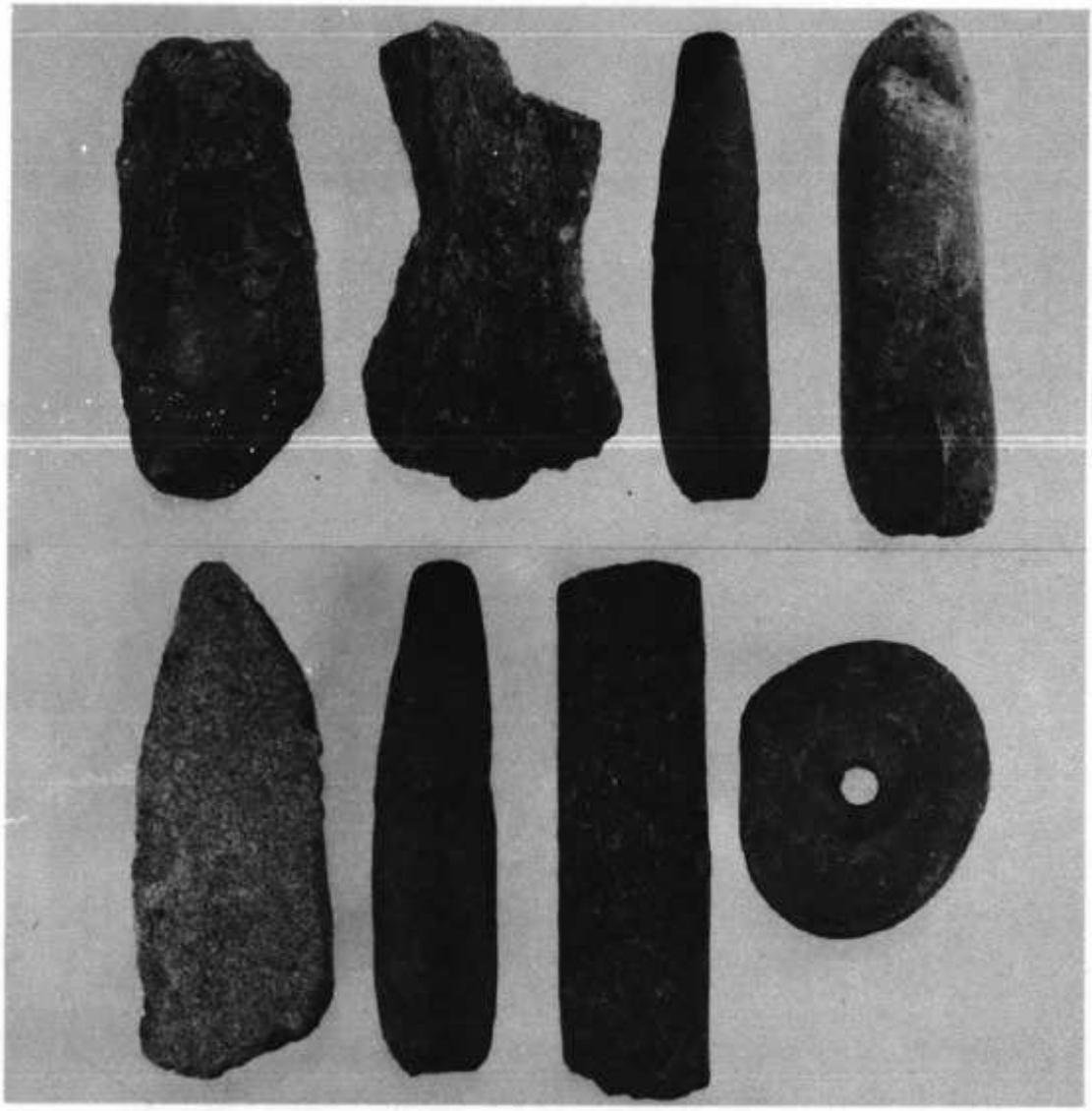



図25　第Ⅳ・Ⅴ群土器



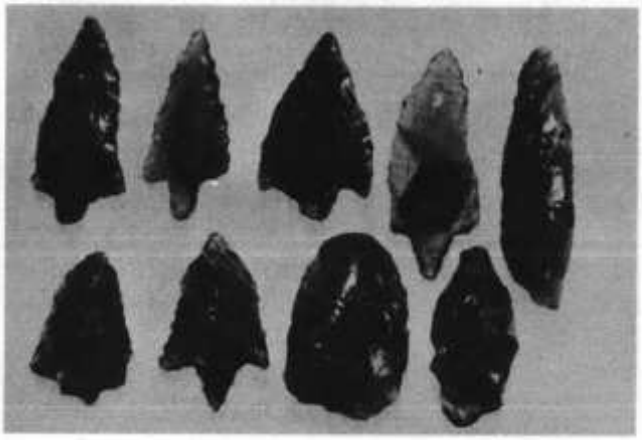


図26　石　　器

# ニ ッ ヤ 遺 跡

—— 緊急発掘調査報告 ——

昭和56年3月10日　印刷
昭和56年3月14日　発行

編　集　長野県上伊那郡宮田村教育委員会
発　行　伊那市青木町伊那合同庁舎内
南信土地改良事務所
長野県上伊那郡宮田村
教育委員会
印刷所　長野県諏訪郡下諏訪町広瀬町
㈱オノウエ印刷